口頭発表「チャボはみんなのお友達」
－幼児の体験教育－

向山陽子※　下郷奈穂子※※　井合　薫※※

はじめに

大和郷幼稚園は，文京区本駒込６丁目，六義園の隣に位置し，周囲は緑が多い住宅街である．が，園を一歩出ると，コンクリートの舗道と車に注意しなければならない東京のど真ん中にある．ただし，文京区本駒込６丁目と豊島区巣鴨１丁目にまたがる社団法人大和郷会が大正４年に設立し，今年が創立80周年目という歴史と伝統に育まれた幼稚園のため，地域に守られ，地域の理解を得て,子どもの声はもちろんのこと,土埃・チャボの朝鳴き・焚き火の煙・落ち葉などの苦情もなく，自然の教育力に依拠する教育方針を貫くことが出来ている．もちろん，公道の落ち葉の掃除・出来る限り煙を出さぬ焚き火の技術,行事の度の挨拶,大和郷会広報誌への毎号投稿など，地域の方々への御礼の気持を表すとともに，幼稚園の教育方針を理解して頂くよう努めている．

○平成21年度園児教職員構成
・園児：263名（年少４クラス，年中３クラス，年長３クラス）
・教職員：本務21名，非常勤３名，講師３名

○教育方針

環境（人・モノ・事）との関わりの中で心も体もしなやかでたくましく，自己コントロールの出来る子どもに育てる．

自然の教育力・子ども同士の教育力・モノの教育力・教師をはじめとする本物の大人達の教育力に依拠しながら，遊びに遊ぶ幼児期にふさわしい生活を通して，心情・意欲・態度を育て，人生の根っことなる様々な力を培う事を目標にしている．

○自然環境

土の園庭，虫が生息する茂み，池，田圃，畑，実が生り蝶が卵を産む木々を取り込んだ自然環境には，ウサギ，モルモット，チャボ，カメ，ザリガニ等の飼育小動物の他に，草むらや畑や木々に生息するダンゴムシ・バッタ・カマキリ・カブトムシ・クモ・・・，池に生息するメダカ・ミズスマシ・オタマジャクシ・・・，木の穴にいるヤモリ，ツバメが毎年巣作りを試みてはいるものの営巣までにはいかないが，今年，シジュウカラが２羽園庭から巣立った．畑や田んぼや腐葉土に子ども達が目の色を変える幼虫がいたり，園舎内の２つの水槽にはキンギョとネッタイギョが泳いでいる．生命が謳歌する春から晩夏まではどのクラスにも飼育ケースがたくさん置かれ，カメな

どは一年中,子ども達の世話をうけている.
○獣医師等との連携
小動物が病気と思われた時，獣医さんにお世話になる．治療は勿論，餌や飼育環境のことなど御指導を戴いている．残念ながら死なせてしまった時は幼稚園葬を行う．園児達が花を供えてお別れする．環境衛生局に教えて頂いた寺社に埋葬していただく．
○墓の設置
幼稚園にもお墓があり，遺体から毛や羽の一部を頂き，埋葬して供養している．日常，子ども達はお花やお水が供え，時折友達と共に手を合わせる姿がある．また，保護者に紹介したところ，入園の頃の不安を親子共々，モルモットやウサギにはお世話になったとお寺にお参りに行って下さった家族もあり，有り難かった．この３月，新しいお墓に霊を移す儀式を行った．保護者である僧侶に読経をお願いし，供養した．
○飼育動物
保育環境としてのウサギ・モルモット・チャボ等の小動物を考えているが，チャボに関しては，子ども達に・卵を産むチャボを体験させたい・ヒヨコのいる生活を体験させたい・チャボの家族として望ましい(ストレスにならない)オスとメスのあり方で飼育したいと，職員会議で時間を割いてきた．獣医師を始め，様々な方面の方々に御協力を得て今に至っている．改めて感謝申し上げたい．

１　チャボを中心に

(1) 30年前からウサギがいた・・・死産の始末を担当教員がしていたことを印象深く覚えている
(2) 平成16年度：園舎改築による引越・鳥インフルエンザで世間が姦しい時・引越

先の近所への配慮からチャボ５羽(オス３メス２)を工事現場に残していく．(ウサギ２羽・モルモット２匹を連れて行く．残されたチャボにとっては，広い住環境・子どもからの開放・手厚い世話を得る)が，７月，メス２羽だけが盗まれる．
(3) 平成16・17年度：モルモットが入園したばかりの園児に握りつぶされる．ウサギは水をかけられるなど多難・・・・人間以外の生命がいない環境に子ども達の日常があることを思い知らされる．引越先・改築後の園舎への２度の引越を経験した．教員達も初めての環境に予測が付かず，小動物との教育目標・環境整備にはなかなか行き届かなかったのが現実であった．
(4) 平成18年度(資料参照)：チャボ・オス３羽を婿に出しメス３羽の嫁入り．職員会議で，繁殖計画をも含めて“環境としての小動物について”が議題として頻繁にあがる．「“卵を産むチャボ”との体験をさせたい．ヒヨコを孵したい．ヒヨコを抱かせたい．ヒヨコから育てたい．卵を食べて生命をいただこう．」年長児

達が設計した図面を基に，飼育小屋完成

(5) 平成19年度(資料参照)：ヒヨコ誕生５月２羽・９月２羽．チャボに畑や花壇の新芽を食べられ，チャボ対策にネットを張る．チャボ専用の小松菜畑を作るが，功を奏するはずもなく・・・．子ども達もミミズをやったり，姫りんごや柿，サツマイモなどをやったりして，チャボの好物を知りたがる．

オス同士の争い・飼育環境のストレスなどをめぐって，職員会議でチャボ（の数）に関して話し合う．卵は子ども達が料理して(ホットケーキ・クッキー・ゆで卵・目玉焼き・・・・)いただく．

(6) 平成20年度(資料参照)：卵を産んでいたチャボのお母さんが婦人科系？の病気で隔離，手術．群れには戻れずいじめられる．年長児たけ組子ども達が卵を孵したいと相談が始まる．

たけ組は，１年間のチャボとの生活を春夏秋冬にまとめて，２月の生活発表会に劇にする（第12回学校飼育動物研究大会にて発表）．卒園前に雛が孵り，たけ組が全園児に名前を募集，「ピーちゃん」と決める．

(7) 平成21年度：４月，メス１羽オス２羽を嫁と婿に出す．現在，オス１羽(しろ)メス３羽（ぴよ・こっこ・ぴー）一家仲良くいつも連れ立って，暮らしている．こんなに仲良しの代も珍しい．朝，小屋の鍵を開け，放し飼い．子ども達との力関係も自然に共存．夕方，自ら小屋に入る．子ども達も抱くのが上手になり，抱かせてもくれる．チャボがいやな時は，木の上に逃げている．そんな時，子ども達は「今は抱かれたくないんでしょ」と教えあっている．子ども達の料理にチャボの卵を使うのは当たり前．割れてしまった卵を見つけた子ども達は，元気の無いチャボのお母さんにあげている．子ども達はよく観ていて，産んだ卵や割れた卵を食べているお母さんチャボを見ている．

(8) 子ども達は，２学期末現在，希望者が世話(掃除・餌やり)をしている．３学期には掃除を広げていこうと教師間で話し合っている．

２　これからも

・園務分掌に飼育・栽培をしっかりと位置づけていく
・休日は間を２日以上空けないように，飼育・栽培の係りを教師全員で回す．
・保育室の飼育物は，長期休業中，保護者にも協力を得て,家で世話をお願いする．
・獣医師や水生生物などの専門家の指導を仰ぐ体制を維持する．
・子ども達に何を体験させたいのか，教材として，飼育環境，羽数などを，担当者を中心に職員会議で話し合い，教育課程に位置づけていく．

３　子ども達にとってのチャボの存在

・入園直後の子ども達にとってチャボやウサギ，モルモットの存在は，慰み・癒しになってくれていて，とても有難い存在である．と同時に，されるがままの存在

ではなく，嫌がり，逃げ，時には反撃もしてくれる，意志ある生命を実感できる存在である．

・入園直後，保育室に入れない子のワンクッションになっていて(保育室に行く前にチャボに会う導線)，集まりにも“チャボが小屋に入ったので僕もお部屋に入ろう”と園生活のモデルになってくれている．
・抱くと温かい．上手に抱くと心地良く抱かれて，子どもの手の内に納まってくれる．下手に抱いたり，嫌がることをするとつついて，付き合う関係を教えてくれる．生き物が苦手な子の入門になっている．
・卵を産んで，子ども達の生活を豊かにしてくれている．
・生命・生きることを，温もりとして，食事や排泄，掃除の必要性を通して，教えてくれる．
・オス１羽の周りにメスが群れになり，子ども達に解りやすい家族の姿を見せてくれる．
・オス・メスの姿，群れの姿，病気の姿など，子ども達は観察眼を育てている．よく見ている．なかなかの絵を描いている．

４　第12回全国学校飼育動物研究大会での質問を受けて

「放し飼いにしているとのことだが，糞など，衛生面はどのように対処しているのか？」との質問に対して，「ほぼ決まったところで糞をしていること」「毎朝，園庭安全チェックの際に，保育者が見ている」と答えた．

その後も，質問の意味を反芻する日が続いた．違和感がぬぐい切れずにいたのが“糞”“衛生面”という言葉だと気付いた．わたし共は，ウンチと呼び，チャボのウンチも赤ちゃんのウンチも，園児達のウンチも（願わくは，私のウンチも），健康チェックのバロメーターとして“ウンチ”に親しんでいることを再確認した．五味太郎氏の「みんなうんち」ではないが「食べるからみんなうんちをするんだね．」である．また，チャボの飼育環境を不衛生にしないようにとは気遣っているが，それは保育室が不衛生にならないように心を配ることと同じで，チャボの排せつ物が不衛生だとは感じてこなかった私どもの感覚に気づかされた．ひょっとすると，小学校以上の学校よりも生命が産まれる生活により近いのが幼稚園なのかもしれない．

グチュグチュベチョベチョの生命の近くで子ども達と身体中で感じながら生きていきたいと，改めて思った．

（学校法人大和郷学園大和郷幼稚園
※園長　※※教諭）